

福島紀行 2017

6年たって「復興支援は終わった」？福島へ

2017年4月3日～4月5日

狛江の放射能を測る会 二階堂 まり

毎年この同じ時期にほぼ同じ場所を訪れて6回目。毎年景色がすっかり変わるところ、見た目はあまり変わらないが話を聞くとかなり変わっているところ、色々ある。去年も「帰還」へ「帰還へ」と行政がごり押しする姿が見えた。

今年はさらに、「オリンピックまでに『普通』に戻して『復興完了』にしよう」という力が弱き者を切り捨て苦しめている現状を強く感じた。

< ザ・ピープル（特定NPO）でのお話 > (<http://npo-thepeople.com/>)

元々は古着のリサイクル活動をしていた NPO 法人。被災者や原発作業員が多く移ってきたいわき市にあり、大震災・原発事故後、中心になって支援活動をしている。

いつお会いしても笑顔で八面六臂の活躍の吉田恵美子理事長に今年もお話を伺いました。

手探り状態からどんどん発展させてきたオーガニックコットンの栽培、製品作りだが、イギリスの Lush Japan が販路を広げてくれている。去年から 45cm 四方の布を向こうのデザインで 2 万枚販売していたが、今年の 3.11 から 70cm 四方の大型風呂敷の販売を始めた。「ふくしまから世界へ届けるメッセージ」と謳って、世界 49 カ国で 90 店舗。今まで貯めていた収穫物が全部はけて、今までは売れなければ困るので控えめだった生産もどんどんやっていかねばならなくなる。

問題点：①日本での適正価格とグローバル適正価格（より安い）で違いがある。経済面は補助金で補うことになるがそれでいいのか？事業 vs 社会的活動、両面あるが、農家主体・販売者主体にして、「福島オーガニックプロジェクト」という団体として最終的にペイするものにしなければならない。富岡に帰還する人や小高町の有機農家の人が種をほしいと言ってきている。②「口に入れない作物の栽培を」と謳って始めたものであり、今「福島の食べ物は安心です」といっている中でずれているのだろうか？だが、双葉地域で



ついに「復興ボランティアセンター」は廃止された
と残念がる吉田さん



避難者の農作業と交流目的で始めたオーガニックコットン栽培はイギリスの Lush Japan の販路へ、さらに世界 49 カ国へと広がる。

は「双葉」と付いたら口に入れるものは売れないのが現実なのである。③コットンはもともと発展途上国で搾取されて栽培されているもので日本の状況は対極にある。ペイする額で売るには「付加価値のあるもの」として売り出す必要があり戦略的なものが必要になる。

長々綿：エジプト。長く細く強い糸が取れる。白い。布に向いている。

和綿：短い、こしが強い、薄茶色。布団綿。

和綿の特徴を「売り」にする。ブツ切れ故にモコモコして肌に触れたときにひんやりとせず、バスタオルなどによい。白の方が色を付けるのにいいはずだが、Lush は薄い茶色に色を付けて微かな色合いの価値を「売り」に。

コットン栽培は、「みんなの畑」で毎回 30 人くらいが世話。コットン畑の下のところは夏冬野菜の食べたいものを栽培して、夏祭りなどの交流の場でご馳走を作ってふるまう。リーダーの一人は妻をなくし、公営住宅に一人で住んでいるが、扉が鉄製なので外の社会と遮断でき、やる気がなければ閉じこもる。が、野菜は毎日みてやらねばならないので出かけていき、農家のおばちゃんたちと繋がり、元気にやっている。2018 年に「全国コットンサミット」をここでやるように働きかけている。コットンプロジェクトは作業を仲立ちとする交流サロンだ。公営住宅、借り上げ、仮設、住宅を再建した人、どこにいる人たちも集まってくる。やはりいわき市の中で孤立している人が多いのだ。

いわき市（の社協）のスタンス：被災者は（県営・市営）住宅に入ったのだから「復興計画は完了。課題は残ってない」「復興ボランティアセンター」は終わりにして以前の「常設のボランティアセンター」に戻る。いわき市以外の人は帰還してそこの役所が面倒をみるように。檜葉町からの被災者への住宅供給終了をあと 1 年延ばした。帰りたくても帰れない人がたくさんいるし、帰ると決めても家を建てるのにも順番待ちだから。仮設にまだ 3 分の 1 くらいいるだろう。

広野町はこれまで 60 % 程度の帰還率だったが、今年に入って急に増え、80 % が帰るといえるがそれはこの提供住宅の閉鎖によって梯子を外した

（2017 年 3 月までで仮設・借り上げ共に閉鎖）ためだ。5000 人中（5500 人だが住民票を移した人は数に入れないので帰還率が高く見える！）4000 人が帰り、3000 人の作業員がいる。彼らの飯場は定住型のアパートになり、出張者用のホテルもできている。いわき市にいた作業員

が現場に近い広野町や檜葉町に移動し、いわき市の「夜の街」は落ち着いてきたが、店などをどんどん作った「バブル」ははじけてしまった。いわき市の小名浜地区にはイオンができ、富岡町には桜モール（ヨークベニマル）がオープンする。作業員のために食を提供しようというスタンスでやっている。ずっとそういう町にしようというのがこの町の在り方なのか？大きい店舗ができて小さい商店たちはどうなるのか？生きながらえるのか。

富岡町：東電は作業員に住民票を移せと言っている。すぐ戻りたいと言っている住民は 500 人で作業員の方がずっと多い。第二原発は廃炉にせずにいるが、どうするかの住民の意思を示すときに住民の内訳は「住民票を移した作業員」の方がもともとの町民よりずっと多くなる。町の未来を



下神白(しもかじろ)には復興住宅(左:県営。原発事故で帰宅困難区域となった市町村の避難者向け)と災害住宅(右:いわき市営で津波被災者用)が道路を挟んで同時に建設された。集会所の使用方法などが大きく異なり、それぞれの住宅内の交流をはじめ、両者の交流と地元民との交流など、複雑なコミュニティ作りにザ・ピープルでは交流員を養成している。

「町民」の意思で決めるといった時の「町民の意思」とは誰の意思になる？県外に避難している自主避難者（区域外避難者）は、住宅補助金打ち切りになって戻ったとして、元のように地域と繋がれるのか？（勝手に逃げた！という眼） 帰京してみると、今村雅弘復興大臣の「自分の責任」「裁判でもなんでも起こせばいい」発言。怒りと悲しみでいっぱいになる。

避難者がお喋りを楽しめる場所として、久が浜の小学校跡地に新しくオープンの商業施設「浜風キララ」の中に作られることになった古着ショップ（ピープルの元々の姿）で、おばちゃんたちにお留守番をしてもらう。

< いわき市の「海岸線」を走って久之浜まで >

防波堤：「海岸線」を走り時々降りて歩いてみるが、海が、全く見えない。盛り土をした色気のない防波堤が延々と続く。防波堤に上ると（多分上ってはいけないのだが？）砂浜の向こうはテトラポットの山。家を建てても、朝起きて戸を開けると目の前は遮られ海は見えない・・・震災直後に来たときにどこまでも続いていた砂浜、美しい海が目に見え付いている・・・代わりに防災緑地の高い土手が延々と続く・・・これで

良いのだろうか？ →「たらちね」（後述）の鈴木事務局長の話では「地震後一年くらいで決めちゃって、アクティブな人は反対していたが、ほとんどの住民は反対する余裕もなかった。（政府が）

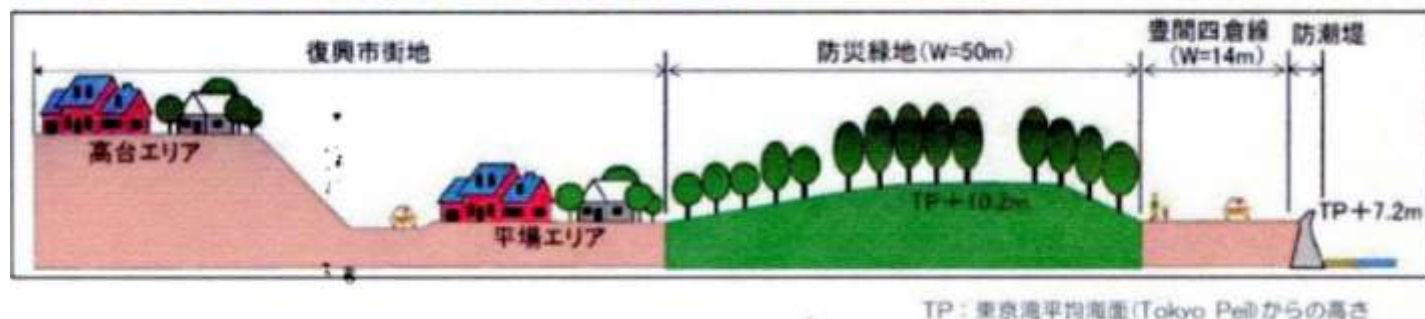
『連休の間に大切なことを決めちゃう』のと同じですよ」「津波が来た時に海の様子が見えないとすごく不安なんですよ」「住民の意思は入らない。選挙を除けば。みんないるところがバラバラだし」



いわき市は津波の被害を受け、330 名以上が亡くなっている(関連死を除く)。写真は合磯(かつお)・豊間(とよま)海岸だが、こうした堤防(防災緑地)がいわき市の海岸線にずっと続く。堤防内側の住宅地も幾分かさ上げされているが、そこからは海が見えなくなった。

合磯・豊間海岸から塩屋岬を望む。防潮堤の手前に県道豊間四倉線が走る。その手前に海面から 10.2m の高さで堤防(防災緑地帯)がある。

津波への多重防御や高台住宅地の整備などの復興まちづくりのイメージ



津波に襲われた豊間中学に行ってみると 2 年前には残されていた校舎がきれいに片づけられ、整地と堤防のかさ上げ工事が行われていた。2012 年 4 月に訪れたときには、プールに瓦礫が山のように集積され、壊れた体育館の時計があの時刻を示したままで、その光景が今も目に焼き付いている。

久之浜の「いわき市地域防災交流センター」：1 階は市役所の支所で相談などやっていた。2 階は「ふれあい館」で津波のすごさ、秒を追っての映像（久之浜）、逃げることの大切さ、津波は何度も来る・・・など立体的に展示。

< いわき放射能市民測定室 「たらちね」 にて > (<http://www.iwakisokuteishitu.com/>)

「放射能市民測定室」のみだったが、今年度から新たに診療所をオープンして「たらちねクリニック」として併設されている。NPO が医療機関をやるのは初めてで NPO は「広く不特定多数を受け入れる」となっているので誰でも診察してもらえる健康保険も利く診療所だ。放射能測定室と診療所を持っているところは珍しい。地域のための市民測定室以外のイデオロギーはない。血液検査・炎症検査・鼻孔検査・インフルエンザ検査などの検査ができる機器があり、ないのはレントゲンくらい。以前からある甲状腺を測る丸い機械にさらに胸や腹の被ばくも測れる器具がついた。診療所のマネージャー松坂さんは子どもにも母親にも馴染みやすそうなおねえさんで以下のように話してくれた。普通の診療所に行きにくい人も来やすいし、他との違いは、多方面につながっていること。いろんな先生に相談できるし、食べ物の心配なら測定、子どもが遊べないなら沖縄で保養をやっている球美（くみ）の里を紹介する。さらに一部屋増やして独立した相談室の準備中だ。WBC(whole body counter)は、最近では 99% が会社から測定に来る除染作業員で、公的機関では 100 人待ちとかなるので回されてくる。本当は 2 時間くらい測れば測定レベル下限値を二桁にできるが、いっぱい来るので測定時間を短くして 200 ベクレルにしている。球美の里でやっていた藤田先生がいわき市に移って常駐になり、他に放射線系の医者が 6 人、看護師 2 人、医療事務員とマネージャーの松坂さん。理事には眼科医や歯科医も。当時 19 歳以上だった人は健康ケアの考慮外だったがきちんと調べないといけない。子供の健康被害がこれからどんどん増えるだろうとのことだった。先日の公の発表で、甲状腺の検査後に癌を発病した 4 歳の子が患者の数から漏れていたり、県外に出て発症した人が無視されたりしていたが、そういうことを含めて日々の医療ができる場所が必要だ。東京の甲状腺疾患専門医の伊藤病院も満杯で検査を受けられない。

事務局長の鈴木薫さんはこれまたエネルギーに溢れ、軽々とすごい課題に挑戦していく。以下は彼女の話。

帰還について：檜葉町役場の職員も帰りたくないの夫だけ戻してあとは町外に住んでいたら「全員で帰れ」との命令が出た。東電の若者の宿舎は線量の高い大熊町にあり、彼らは昼間は更に線量の高い現場へ行くのだ。広野町に作業員が 3000 人も住むが、(大熊などと比べたら) 広野はずっといいわけだ。除染しても、汚染は移動するからまた戻ってしまうし、汚染が広大すぎて十分な除染は無理。でも、オリンピックに向けてどんどん原発の近くに人を住まわせる。学校の土は行政の OK をもらわないと正式には測れないので、取ってきて測ったものがたとえ線量が高くても市に対応を頼むことができない。



必要ならやる！は診療所も開設した。他の医院との違いは様々な関係者とつながっていること。保養が必要なら球美の里を紹介できる。



たらちねクリニック(内科・小児科)の松永マネージャー。前職は幼稚園の先生で、いかにも子どもに好かれそうな方だった。

β線測定も空いている時間がないほど忙しく回転している。海水や魚や海底の砂の検査は二か月に一回くらい。

雑誌記者が持ってきた第一原発の敷地内の海の泥より東京の葛西の海水浴場の海岸から 150m のところの海の泥の方が線量が高かった。汚染した山（県外でもホットスポット）から川に出て、海と合流するところが高い。NHK の番組で東京の河川敷を調べていて、あの辺りは汚染されていて散歩やジョギングをしてる場合じゃないと言っていた。東日本から名古屋までの人たちが西へ避難して沖縄まで逃げている人たちもいるが、沖縄は基地の関係で放射線量を心配してきた歴史があるとの話。だから原発事故以前は琉球大が他にはないような放射線測定器を持っていた。今は福島でも持っているが。

< 医療生協の伊東達也さんの話 > (<http://hamadori-coop.jp/houjin/>)

福島で闘われている 28 の集団訴訟の内の 1 つの原告団代表である伊東さんのお話は毎年個別に伺うのだが、今回は東京民医連の新人研修の日に当たってしまったため、研修生 60 名と一緒に小名浜にあるいわき・ら・ら・ミュウで講演を聞いた。

爆発した 4 基の内、3 基の核燃料（1573 体）がいまだ持ち出せず溶けた燃料共々水をかけ続けなければならない。取り出せなければ「石棺」か？地下水の流れも止められず汚水タンクは増え続けている。（安倍首相がオリンピック招致のために「コントロールされている」と嘘を言いましたね！）堤防は石を積んだ仮設のもののままで、地震がまた来たらどうなるか？！

2 月末の避難者は県内に 39,600 人、県外に 39,800 人の 7 万 9800 人。内、仮設住宅に 12,400 人。福島県民の自殺者は 87 人で、宮城県の 48 人、岩手県の 41 人よりはるかに多い。震災関連死は 3 月末で宮城県の 922 人、岩手県の 460 人に対して福島県は 2139 人だ。

福島県内 43 の自治体（59 中）で行われた除染による放射性廃棄物は現在までに東京ドームの容量の 12 個分。これを原発立地の双葉町と大熊町にまたがる 16 km²（狛江市の 2.5 倍）の土地を確保して「中間」貯蔵施設を作りそこに運ぶことになっている。地権者は 2,360 人だが約束を取り付けられたのは面積で 21%のみ。「最終的なものではなく」30 年後に持ち出すと法律に書き込んでいるが、それなら「借りれば」いいはずだ。なぜ買い取るのか？30 年後に返すなんて嘘！！

地権者の苦しみ：故郷を追われ、絆も切られる。「売ってしまえば終わり」で後に子孫が何を言っても無駄になってしまう。しかし現在、現場保管（自宅の庭や校庭に埋められている）となっていて、あるところが十数万か所もあり、早く運び出してほしいという住民の思いも知っている。



新入職員研修会で講演する伊東達也さん。原発事故から6年経った福島の現状と避難者の苦しみを、氣迫をこめて訴える。

震災関連死者数							復興庁
	2011.9	2012.3	2013.3	2014.3	2015.3	2016.3	合計
	半年間	半年間	1年間	1年間	1年間	1年間	5年間
福島県	1,031	362	346	195	84	67	2,085
宮城県	869	30	14	5	4	0	922
岩手県	395	38	20	6	0	1	460

福島県の直接死は1,603人。2013年11月で超え、2015年末で2,000名を超える。

伊東さんの講演では 2017 年 3 月末で福島県は 2,139 人に。

政府・東電はすでに就労損害賠償を打ち切り、営業損害補償も3年分一括払いで打ち切り、避難区域外からの避難者に対する住宅補助はこの3月で打ち切った。→それに対して4月4日今村雅弘復興大臣は「本人の責任でしょう。裁判でも何でもやればいいじゃないですか」繰り返し質問する記者に「出ていきなさい。二度と来ないでください」「うるさい」と記者会見を打ち切る。精神的損害補償も2018年3月で打ち切る予定。

2016年までに帰還宣言を出した5市町村の区域での平均帰還率は13.1%。楢葉町では50歳未満は2%。

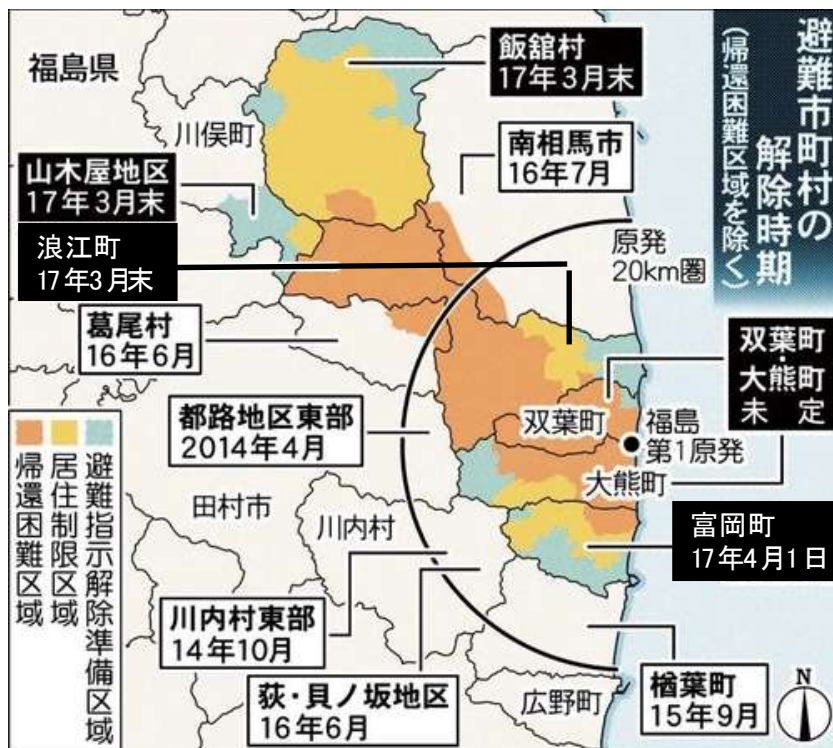
賠償打ち切り後の政府の支援策が見えない：①全国に広がる帰れない人への支援 ②元のふる里へ帰った人への支援 ③福島県内に住み続けている180万人への支援

事故処理費用：11兆円と言っていたが21兆5000億円（国の一般会計予算の20%）になると去年末に発表。民間の試算だと50兆～70兆円と言われており、廃炉だけでもこれで収まる見込みなし。これを国民が負担?!とんでもない!

問題の根本は、原子力損害賠償法（原賠法）の措置額を故意に低くしたこと。1961年に法律を作ったときに原発事故被害額を日本原子力会議に試算してもらおうと、想定最大3兆7300億円（当時の国家予算の2.5倍!）と言われたのに、それでは建設を反対されるし「原発は安いエネルギー」と言えないので隠した。そして、わずか50億円でスタートしそれしか積み立ててこなかった。3.11前に1200億円に引き上げていたがそれでも想定額の0.56%の額。だからお金が足りないから電気料金に上乗せして国民に払わせることにした。さらに原発を持たない新電力も含む全国の電力会社の「託送料金」に上乗せして電気料金を値上げさせ回収しようとしている。原発で儲けた人たちはそのまま国民には過去にさかのぼって「安く享受してきたのだから」と払わせる。儲けてきたメガバンク・原発メーカー・ゼネコンそして10電力会社に負担させるべき。それでも不足したら、原発推進をしてきた国が予算に計上すべき。

甲状腺癌：2016年9月末までの検査結果（癌確定&疑い）・・・一巡目先行検査（18歳未満、2011～2013年、対象37万人）115人。二巡目の本格検査（2013～2015、38万人）68人。県の調査委員会の報告だが、検査した後に癌になった人は報告していないし、他機関で検査した人も報告しないので185人はいる。

原因を巡っては原発のせいではないという研究者もいるが、「大切なことは、これを原因論争に終わらせず、子どもたちの継続的な健康診断・検査と医療体制の充実と確立が最も大切であることを忘れないことだ」と伊東さんは強く訴えられた。また、せっかくできた「子ども被災者支援法」



避難指示が解除された自治体の住民の帰還状況

	帰還者数(人)	帰還率(%)	避難指示解除の時期
田村市都路地区東部	231	72.4	2014年4月
川内村東部	62	19.9	14年10月 16年6月
楢葉町	737	10.0	15年9月
葛尾村	102	7.6	16年6月
南相馬市小高区など	1,231	11.8	16年7月

【注】葛尾村と南相馬市小高区は帰還困難区域を除く

帰還率：避難指示解除時の住民登録人口に対する比率。
一割ほどの被災者がその時点までに住民票を移している。

が全く働いていない。問題点の1つは国の責任を「社会的な責任」とし「法的責任」が書かれていないこと。第3条に「国は、原子力災害から国民の生命、身体及び財産を保護すべき責任並びにこれまで原子力政策を推進してきたことに伴う社会的な責任を負っていることに鑑み・・・実施する責務を有する」と書き、巧妙に法的責任を認めていない。

< 檜葉町役場の応接室で >

避難指示解除になったのが1年半前で(2015.9)今、戻ってきた人が800人を超えた(7300人中だから11%)。今年の春を帰還目標として「戻ってください」と呼び掛けている。町は除染が終わって各行政区に放射性廃棄物の仮置き場ができ、診療所も確保、老人ホームもでき、コンビニ2つ、郵便局、東北銀行、スーパー、宿泊温泉施設などほぼできている。これまでいわき市のいわき明星大学に設置していた仮設の子ども園と小中学校は閉鎖し、子どもが少ないので学校は小中一緒にして4月6日に再開。600名中105名が戻る。子ども園も作り35名が入る予定。町外から通う子どもたちは広野駅まで電車で来てそこからスクールバスに乗り、バスは町内の各家で生徒を拾いながら登校。広野町はいわき市からバスで登校させていたがとても時間がかかるので電車に変えている。災害公営住宅23戸(希望を聞いて計画)を作る。分譲もするし受け皿を用意している。

住民の7割がいわき市に避難しているが、その仮設住宅・借り上げ住宅は供給期間が終わり、来年3月までで閉鎖(広野は今年の3月で供給が打ち切れ梯子を外されたので、80%もの人が戻った)。檜葉町は帰宅困難区域を持たないためにいわき市の下神白(しもかじろ)等の復興公営住宅には入れない!町外で自宅を再建する人は自前でやらしてもらおう。若い人たちは町外に住む人が大部分。今400世帯が未定と言っているので一つ一つ確認していく。つまり、戻るように説得する。どうしても行き場のない人は?「町として相談に乗ります」と。(つまり戻ってもらうように・・・?)。出て行った人は町としては何もしない。産業としては、前から工業団地にあった企業が「檜葉産」として製造するのは風評被害があつて難しいとして撤退するところが出てきている。廃炉関係の企業からは声がかかっており、ロボット関連の研究機関がもともとあるので、廃炉のための産業の誘致を進めて雇用を計る。立ち退いた人たちの土地を買い取って企業を誘致する。また、Jビレッジを今年の夏に復活させる予定。

住民の8割が帰ってくると想定している!!膨大な量のフレコンバッグは?自分たちは慣れてしまつてあまり気にならないが、目につくものはどけたいので、8000ベクレル以下の可燃性のものを選別して福島第二原発隣接の津波を受けた波倉地区に仮設焼却所を作って、灰にし固形化して、富岡町の灰保管施設に持っていく。



檜葉町役場近くの6号線から西を見る。かつての田圃に緑色のシートに覆われたフレコンバックが続く。



富岡町の焼却施設(左側。煙が出ている)と大型のテント張りの焼却灰保管施設

< 富岡町～飯館村 >

< 富岡町 >

避難指示解除が出たが住民はほとんど見かけない。あの有名な「夜の森の桜並木」はまだ色づいてもいないが、「お菓子のよこた」が、入り口の上の看板はそのままでは **JV**(大手建設共同事業体)の建設事務所になっていた。復興事業は大手が儲かるようにできている。店前の広い庭スペースには椅子が並べられ、桜の木にはライトアップの器具が取り付けられ、土日の桜祭りの準備が着々と進められ、作業員が動き回っていた。横の裏のトイレがついに壊されて新しくなり、去年まで放置されていたトイレの3月11日のままの日めくりカレンダーは取り除かれてしまった。農地にはソーラーパネルがいっぱい立ち並ぶ。もう農業は無理なのだ。

< 飯館村 >

伊達市・飯館村境：広い野原にポニーの群れが見える。土から少し顔を出している草を食べている。近づくのと寄ってきた。向こうには足の長い普通の馬も。古い看板にはジョッキーが乗っている絵も描いてあるから競走馬も育てていたのだろうか。この6年で初めて馬の姿を見た。避難していたのが戻されてきたのだろう。

丘の斜面で迎えてくれる「まえた」の芝生文字。きれいに整備しているようだ。前田地区の長谷川区長さんは、飯館村長の菅野さんと一緒になって村興しをしてきた人だが、村民の健康を優先して、山が除染されていないので、線量の高い状態のままの帰還に反対の立場だ。一方、村長は除染を積極的に政府に働きかけ、村の早い復活を願っている。みんな故郷を愛しているのに、それを分裂させてしまうのが原発だ。そしてそんなことにはお構い無しに「安全宣言」をする国。怒りと悲しみを覚えた旅であった。

白石：高台の白石小学校が間近に見える 399 号線と 12 号線の交差点の川べりで測ると $0.6 \mu \text{SV/h}$ だが交差点の 12 号線沿いにあるモニタリングポスト (MP) の表示は 0.139。え？その前で測ると 0.27 くらい。MP を設置するところはしょっちゅう除染してるんだな。MP の数値と我々の測定器(複数)の数値との違いは前からこんな感じだ。

ひもろぎの里など：去年来た時には「ひもろぎの里」

(神籬＝神霊を招き宿っていただくための神聖な場所)の石碑が撤去されていて、道路の反対側が広大なフレコンバッグ置き場になり作業車が醜く音を立てて働いているのにショックを受けたが、今年は作業はもう終わって 5 段に重ねたフレコンバッグの列の上にダークグリーンビニールシートをかぶせた「山」がずーっと続く。村役場に上っていく坂道は広く



夜の森の桜並木沿い。「お菓子のよこた」の看板はそのまま、「西松・五洋・フジタ建設 JV」の事務所に。4月8日、9日の桜祭りの準備中だった。4日現在、開花していない。



夜の森の桜並木。昨年は満開だった。2.5kmあるが、大半は帰還困難区域 2016 年 4 月撮影



315号線白石月舘線の伊達市・飯館村境の馬牧場。初めて馬に出会った。

整備され、その道の脇の上のところに4つの石碑が移動されていて新しい台座に置かれている。そこだけ車で上がっていけるようになっている。去年のすごかった除染作業は終わったようで慌ただしく大きな音を立てて動き回っていたトラックはほとんど目にしない。その代わりに山を削ってゼオライトを切り出す作業があちこちで行われていた。放射能を吸ってくれるので農地に撒かれている。車で広い村の中を走り回ると、のどかな田園風景の中に広がる広大な田畑に、無粋なフレコンバッグの山が延々と続いていく。その向こうにはのんびりとした山々が連なり、その斜面に日本家屋の家並みが続く。モニタリングポストは0.28を表示。私たちの測定器は0.48。少し行くと、ここにもソーラーパネルがズラーッと並んで設置されている。

赤石沢入り口：震災1年目の2012年に初めて通った時、道路で測定していると毛のふさふさした黒い犬がすごい勢いで嬉しげに走ってきて、犬好きの私が撫でまくとお腹を上にして道路の真ん中に寝転がってしまった。線量も高く、誰もいないと思ったのにちょっと高くなったところの家の縁側におじいちゃまが座っていらした。それから毎年、ワンコと再会できるかなとワクワクして訪れた。去年はだいぶ年取って出てくることはできず、でも私が入っていくとゆっくりゆっくりついてきてくれた。今年はもういないだろうと覚悟をしてきた。庭の奥まで行ったが、やはり、主のない鎖とすっかり荒れ果てたもの置き場に積まれた古布団やいろいろな用具が無言で迎えてくれるだけだった。とても淋しい気持ちになった。道路側には新しい玄関と部屋ができていた。戻ってこられるのだろう。

役場・特養ホーム：村役場では残念ながら会議などとお話をお話聞くことができなかった。今一番忙しい時期だから仕方がない。

役場の隣の老人ホームを今年も覗かせてもらう。2014年に訪れたときに人がいてびっくりしたところだ。初めは80人くらい住んでいてだんだん亡くなることで減っていったが、今は34名。介護士が30名くらい。職員は60名。ほとんどスタッフメンバーは変わらずということだ。避難指示解除で入りそうな人は？今のところないと。だがこの1年で何人か新たに入所したそう。県外からも入ってきていて以前から希望していた方だという。（どこからか聞き漏らした



315号線臼石月館線の臼石に行く途中で「またた」の文字と惑星観測所のマーク(1999年に国内唯一の惑星大気観測所。6.5 μ Sv/h あり、残念ながら2014年9月にハワイに移動)



恒例の展望広場手前のゲートで撮影。お弁当を食べていた避難所から通う管理者が「セシウム弁当だよ」(2014)と明るく自嘲気味に語っていた言葉が忘れられない。



飯館村。帰還解除されたところではどこで写真を撮ってもフレコンバックが写る。今年は加えて良く見られる田園地に設置された太陽光パネル。この姿をどのように考えれば良いのだろうか。

が、もっと線量の高い地域からだろうか)

この4月で「帰還できる」ことになった飯舘村・川俣町の山木屋地区・浪江町と富岡町の「居住制限区域」は今までに何回か訪れて、高い線量と、目に映る美しい自然と不似合いなフレコンバッグの長い列に胸を締め付けられていたところだ。除染作業の景色はほとんど目にせず、目にしたのはさらに増えていたバッグの隊列。耳にしたのは、梯子を外され「あとは自分の責任で」と放り出されている「全く責任のない」被害者たちの声であり話だった。帰ってみれば加害者側の今村復興相の「自分の責任」発言。「偉い」人たちは弱者たちとは全く別の世界に住んでいて見ざる聞かざるで平気なのだろう（言わざるではない！）。でもその中であって、ザ・ピープルの吉田さん、たらちねの鈴木さんのように揺るがぬ思いとものすごい行動力で前に進んでいる人たちのパワーと明るさにはいつも感動し励まされる。嘘で固めて誘致したオリンピックに向けて政府は「原発事故の処理は終わった」ことにするだろう。国民はいつの間にかそれに乗せられて、終わった気になっていくのだろうか。それだけは何とか避けなければ！被災した多くの方たちにとって、まだ何も終わっていない、まだ何も始まってさえいない方もいることを、被災しなかった私たちが覚えていなければいけないと強く思う。そして自分には何ができるのかを考えたい。そう強く思った3日間だった。



飯坂温泉から伊達市に向かった 399 号線を振り返って。中央が吾妻小富士、左が安達太良山。ここにも緑色のシートをかぶせたフレコンバックのヤマがあった。

狛江の放射能を測る会(<http://hakarukai.clean.to/>)

連絡先：西尾真人 ☎03-3480-7477

